

類句漫想

後藤比奈夫

類句と一口に言って、その形態は千変万化である。従ってよく似ているが全く類句だと言いつつ切れない句も多い。素材のあり方、感動やそれに伴う発想のあり方、そして言葉とリズムなど表現のあり方に至るまで、あるいは見かけ上、類句の感じが全くないが、余情に至って類想に結びつくといった作品もある。だから、まず結論を言うならば、どこまでを類句と見るかが実のところはつきりしないのである。

厳密に言えば、中村草田男の名句、

降る雪や明治は遠くなりけり

草田男

は、それ以前に、

類祭忌明治は遠くなりけり

芥子

があったことが分かっているれば、その時点で作ってはならない——大家としては——句ではなかったか。なぜならばこの句の勝れているのは「明治は遠くなりけり」にあるからである。なるほど類祭忌では確かに十分でなく、季節の動く可能性が極めて高い。だから「降る雪や」で定着したわけだが、類句のことを思うならば、芥子氏自身の推敲であってほしかったと考えるのは私一人ではあるま

ている。

年越や使はず捨てず火消壺

時彦

という草間時彦の句。二句を比べてみると確かに類想の句いがする。知ったことなら少々まずいと思ったが、全く同じ形をしていながら、季節の据え方の違いもあって、「年越や」の句は感懐が大きく、句自身おおらかに丸く膨らんでいるのに対し、「蟬蛄鳴くや」は、中七の置きかえもあって、感懐が細身に句姿が火消壺に対して一直線に引き緊っているように見える。私は皆の議論の中に割り込んで、どちらも生かしておいたほうがいいから黙っているようにと指示した。草田男の句のこともあるからとふと思ったのである。

『俳句』（昭59・1）『鷹羽狩行特集』『七草』の一句で橋本美代子が「近くそして遠く」と題して、

星空へ発止発止と芽吹くもの

狩行

について触れている中で、

▲ものみな眠る夜の森、天には星がつぶらに輝いている。森の木々は今こぞって芽吹きに生命を燃やし息づいている。「発止発止」の語がここでは一躍芽吹きに形容に使われ、飛躍をみせている。▼という条りがある。発止発止という言葉のもつ切れ味が、星空と木木の芽を密着させることに成功して、心憎くも幻想的である。ところで私の雑誌で、もう一五年近くも前にこの「発止発止」が流行したことがある。それは私に、

切西瓜 発止発止と種黒し

比奈夫

ができてすぐのことである。この句については「或る眼界」という題で『俳句初学作法』にも書いているが、やはり「発止発止」が写生の目となっただけの句。「星空」の句と比べると、私の句は

い。

俳句もまた、科学の研究のように、一人の研究者の推し進めた成果のうえに立って、その連続の仕事をしてよいものだと思えば、草田男のこの句の行き方もまた正しいとしなければならぬ。本歌どりや漢詩に立脚した芭蕉のころを引き合いに出すまでもなく、いまもなお類句をあえて作ることによって、それ以上の句を作ることには可能かもしれない。

昨年十二月のある句会で、私は座興に、

残菊の色も類句も紛らはし

比奈夫

という句を作った。句会の机上に残菊が一束いろいろな色を重ねて置かれてあり、たまたま人々の話がある類句のことに及んでいた。それは十一月に行なわれた兵庫県のある大会に知事賞の一席を獲得した、

蟬蛄鳴くや捨てず使はず火消壺

という句についてであった。二〇人ほどの選者の中の七選者に選ばれた最高点の句。表彰式の日、私はこの句についてほぼ次のような選評をした。

けら鳴くというような難しい季語を配して、いかにも蟬蛄の鳴きそうな場所と物が描かれたところがよい。ただこの句、最高点でありながらどの選者の特選にも入っていないのは、やはり句柄が古いからで、入選の条件を備えてはいないが、現在にとって最高作ではないのではないか。ただ一つ見どころは、中七の「捨てず使はず」の面白さで、もしこれが逆に「使はず捨てず」であったならば私は一点を投じなかったと思う。

さて、この句の類句だとさわがれていた元の句は、歳時記にも出

現実すぎてまことに幼稚に見える。にもかかわらず私にとっては「明治は遠くなりけり」と同じくらい類想——いや類想を超えて飛躍した類想——と見える。だから、こんな句に出会えると、シャッポを脱ぐより仕方なくなるのである。

以前「ホトトギス」に、

東山回して銚を回しけり

比奈夫

を発表したとき、四か月あとの同誌に、

東山ゆつくり廻し銚廻す

比奈夫

が出た。これは類想というより盗作に近い。私の句も、ときが変わっているの、うっかり真似をされやすい。この句などは悪意がなくとも、改悪でしかないように思える。選者も一々覚えておれぬから大変だと思うが、その作者をじっと見ていて、急に突拍子もない発想や叙法の作が現れたときには、よく気をつけなければならぬ。

このごろのように俳句が作られると、類句から逃れることがますますむづかしくなる。ただ言えることは、時間と、時間を函数とした空間とは、常に過去になかった新しい物が生まれているということである。言葉についてもこのことは同じように言えると思う。ともかく、一句を読んで、ふと別の句が浮かんでくるというような句は類句として片付けてよいと思う。ほんの二音か三音の言葉が入っただけでもこのことは起こる。ただ、おそろしいことだと思わなければならない。父夜半の言葉に、

▲写生を志す私は、或る場合は偶然を怡しむ偶然主義者であるが、多くの場合は偶然の中に必然を求めようとする偶然主義者である。▼

がある。類句についてもいまいしめとならう。